

小平健太 (立教大学)

あらゆる芸術を詩作として考え、そして芸術作品が言語であること(das Sprachsein des Kunstwerks)を顕わにする思考は、それ自体なお言語への途上にある。

H-G, Gadamer

この言葉は「芸術作品の真理(Die Wahrheit des Kunstwerks)」(1960)と題された論考におけるガダマーの最後の言葉である。この論考は、もとはレクラム文庫版より『芸術作品の根源』が刊行されるにあたり、その「導入にむけて(Zur Einführung)」というタイトルで執筆されたものであった。引用に示される通り、芸術の本質は詩作すること(das Dichten)である——こうしたテーゼは言語の言語性(Sprachlichkeit)をもって、ガダマーへと受け継がれた。つまり、この「芸術作品が言語であること」は、言語性というメタ次元をもってあらゆる解釈学的現象の可能性の根本的基盤として、ガダマーの解釈学思想の中核へと置かれたのである。しかし、こうした解釈学的現象として芸術を扱うことは、ベーメ(Böme, Gernot)も指摘するように不当な「解釈学への美学の狭隘化」の一種であり、それをもって純粋な美的次元の領野を貶めてはいないか。芸術の固有な自律的要求を誤認することになりはしまいか(Grondin, Jean)。ハイデガーが準備した芸術作品の存在論の基盤の上で、正当にもそれを引き受け、そして自らの哲学的解釈学において芸術経験におけるロゴスの位相を独自に拡張したガダマーの答えは、否である。ガダマーはこうした芸術作品の存在論の解釈学的な拡張において、芸術について思索することの意義を、かつてハイデガーが存在の意味への問いを時間的地平の内に規定したように、時間的歴史性の内に問い続けた哲学者であった。本発表の目的は、ハイデガーの芸術の思索を基盤としつつガダマーによる芸術作品の解釈学的展開を見届け、解釈学的経験の普遍相から芸術を思索することの意味を問うことにある。本来的に「存在の仕方」を問う芸術哲学(Philosophie der Kunst)は、いかなる問いを芸術に立て、また芸術こそがある答えであるところの問いとは、いかなる思索におけるものであるか。

ガダマーが主著である『真理と方法』の第一部において展開した芸術論を支える理論的支柱はふたつあった。ひとつはカントをはじめとする近代美学の主観主義的思考の克服と、もうひとつは芸術作品の存在論的・解釈学的意義を現象学的手法を用いて記述することである。このふたつの柱はその大部分ハイデガーの芸術の思索に対する応答と見ることができる。グロンダンも評する通り、芸術作品をその真理要求(Wahrheitsanspruch)の内に見て取り、「ハイデガーのテーゼを歴史的な研究でもってより説得力あるものにしたことは、ガダマーの功績である」といってよい。しかしながら、『真理と方法』におけるガダマーの芸術の思索における問題設定は、ハイデガーのそれとは明確に異なる動機に導かれていたのもまた事実である。第一の柱の背後に、ガダマーはそれと表裏一体の関係として人文主義的知見の復興を見ていたし、なんといってもガダマーの芸術の思索の最大の意図は、ロゴスの位相に支えられた解釈学的な真理——すなわち、自然科学的な方法意識とは別の次元において固有に確保されるべき精神諸科学にとっての真理——経験の普遍性へと到達する為の根本的基盤を、芸術経験の内に与えることにこそあった。新カント派の美学理論の固有の先入見によって覆い隠されていた芸術作品の本質への問いを獲得するというハイデガーの思考の歩みと多くモチーフを共有しながらも、両者の芸術の思索が見据えるその先はやはりどこか異なるところに向かうのである。

こうしてガダマーはハイデガーの思想的基盤に従いつつも、ハイデガーによる述語から離れ、独自に解釈学的経験の地平を深化させる道を辿った。ガダマーにとって芸術経験は、

哲学および精神諸科学の領域全体に対して、その有効性を要求する真理の次元を開示すると同時に、そうした領域全体における真理生起の根本諸可能性として言語性の次元を切り開くものであった。こうした解釈学思想は、一見すると「芸術の真理への問い」から「解釈学への道」を見いだそうとする哲学的プログラムの遂行を表すように思われるかもしれない。すなわち、そこで芸術は哲学のためのある種的手段(**Organon**)として位置づけられているのではないかと。答えは否である。「芸術の真理への問い」を通じてガダマーは、芸術がそこへと嵌め込まれているところの言語的なるものの包括的な解釈学的次元こそを明示したのであり、したがって芸術の思索は手段ではなくそれ自身の内に留まり、言語的真理の生起に参与するまさに言語への思索の途上なのである。

芸術が我々に立て、そして芸術がある答えである問いとは、こうして美的な問いではあり得ない。それは他ならぬ解釈学的な問いである。美学は解釈学へと吸収されねばならない——とガダマーは主著において核心的な言葉を残しているが、それはこうした問いの解釈学的連関の内においてのみ、芸術の思索は真に芸術哲学たるがゆえなのである。

[以上、2000文字]